



13
まいん

えんぎ はな
縁起の端

別子銅山といふ
一万人の小宇宙



明治20年(1887)撮影
目出度町鉱山街

えんぎ はな
縁起の端は、別子銅山で初めて、大山積神社がお祀りされた場所です。この場所から、銅山一帯を見渡すことができます。360°のパノラマとして観賞できる眺望の名所です。



緑が甦った山々

めったまちこうざんがい
目出度町鉱山街

跡は、別子山中で唯一「まち」と名が付き、またの名を別子本舗とも言われ、別子銅山の中心地として栄えた場所です。

明治時代当初は、重任局(銅山事務所)や勘場(会計)、接待館など銅山の中枢が集まっ

ていました。重任局の建物には、櫓が設けられ、時刻を知らせるために大きな太鼓がつるされ、朝、昼、晩の三回と、集会時に打ち鳴らしていました。

明治25年(1892)に焼失した重任局の跡地に、同年別子銅山の守護神である大山積神社が縁起の端から移されてきました。その後、料亭や商店など商人の集落となりました。料亭からは、毎夜三味線や太鼓の音によって賑やかな歌声が流れ、百貨店には、近郊の新居浜や西条などの周辺地域はもとより、遠く香川県観音寺あたりからも嫁入り道具を買いにきたそうです。別子最盛の明治後期には、別子銅山の人口は12,400人余りを数え、県都・松山に次ぐ人口規模でした。

鉱山街を形成していた目出度町も、大正5年(1916)の旧別子撤退の際、すべての施設が撤去され、現在は、植林により山一帯は、自然に戻り、一部の石垣や大山積神社の石段、狛犬の一つが残るのみとなっています。



明治31年(1898)撮影
別子銅山記念館所蔵

左二階建の建物が小学校、右上二階建の建物が病院



明治20年代撮影
重任局(銅山事務所)

トイレは?

最盛期には、1万人を越す人々が住んでいた銅山、その人たちのトイレの処理はどうしていたのでしょうか? 答えは、裏にあります。

